

The Exclusion Problem とエピフェノメナリズム

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/33104

The Exclusion Problem とエピフェノメナリズム

柴田正良（金沢大学）

1. トラブル（overdetermination）

蒸し暑い夏の夜、暗視スコープの先に映っていた大統領が、雷鳴のとどろく別荘の庭先でスナイパーの銃弾を頭に受けたのは、激しい落雷が大統領の身体を貫いたのと同様だった。この状況で、もしスナイパーが狙いを外していたとしても雷が大統領を死に至らしめたであろうし、もし雷が別の場所に落ちていたとしてもスナイパーの銃弾が大統領を死亡させたであろう。大統領の死は、二つの別々の十分な原因によって同時に引き起こされたのである。大統領の死は二つの原因によって過剰決定（overdetermine）されていた、と行うことができよう。

この過剰決定の問題が現在の心の哲学において一つの深刻なトラブルを生み出しているのは、現代の常識的な理解として、物理的な出来事の領域が原因と結果に関して閉じている、という因果的閉包性（causal closure）の原理を一般にわれわれが受け入れてるからである。この因果的閉包性の原理によれば、「いかなる物理的な出来事に対しても、それを引き起こすのに十分な物理的原因が存在する」。トラブルは次のように生ずる。まず、われわれの古くからの確信として、大統領を殺害しようという意図は、引き金を引くという物理的な身体運動の原因である。しかし、引き金を引くことが物理的な出来事であるからには、因果的閉包性により、それを引き起こすのに十分な物理的な出来事、おそらくは脳のある種の神経生理学的な出来事が、引き金を引くことの原因として存在していたはずだ。そこでさらに、意図のような心的なものと神経パルスの発射のような物理的なものは何らかの意味で違う存在だ、と主張するならば、引き金を引くという出来事は、心的なものとは物理的なものという二つの原因によって過剰決定されていることになる。スナイパーの銃弾と落雷というような本物の過剰決定は、起きたとしてもきわめて希なことだろう。ところが、心的なものが物理的な何かを引き起こすというような心的因果（意図による身体的行為）の場合には、常に必ず、この過剰決定が生じていることになる。ここで、これまでの人類の科学的探求の教訓（？）として、物理的な因果連鎖の堅固さに優先権を認めるならば、物理的なものが原因としての役割を果たした後で、心的なものが果たすべき因果的な仕事は何か残っているのか、といぶかしく思われるだろう。まさに、心的なものと物理的なものによる過剰決定は、原因としての心的なものの存在を余計なものとして排除してしまうように思われるのだ。これがまさに、＜排除問題 exclusion problem＞の核心である。もしあなたが、心的なものと物理的なものの非同一性を出来事のレベルで保持したいならば（デカルト的二元論）、心的出来事は、原因としての因果的力をもたない。また、出来事レベルの同一性を主張しつつも心的性質と物理的性質の非同一性を保持したいのならば（非還元物理主義）、心的性質は、心的出来事に何かを引き起こさせる原因としての因果的力をもたない。いずれにせよ、以上のような前提から、どちらかの形での心的なもののエピフェノメナリズムが帰結してしまうのである(1)。

この＜排除問題＞はふつう、物理主義的な心の理論に対して、性質間のスーパーヴィーニエンス説(2)よりも性質同一説の選択を迫るものとして提示されるが、本稿の目的は、その論理を最近の心の哲学における機能主義や意識の問題との関

連で描き（2, 3 節）、さらに、スーパーヴィーニエンス説をとることの＜支払い不可能な＞代償として常に設定されるエピフェノメナリズムを、積極的に引き受け可能な路線として提示しておくことである（4 節）。そこでまず、＜排除問題＞のより詳しい展開をキムの議論によって押さえておくことにしよう。

とはいえ、その前に、物理主義者たちがキムの言うスーパーヴィーニエンス因果を認めることになった理由を知っておくことは、この後の議論のためにぜひとも必要である。その理由とは心的性質の多重実現可能性であり、これが同時に、50 年代後半にタイプ同一説として知られたスマートやアームストロングらの還元的物理主義を没落させた原因の一つであった。タイプ同一説は、感覚や意識の心的性質と脳の中樞神経の興奮がもつ物理的性質を文字通りに同一だと主張する。しかし、痛みを感ずることはたぶん、地球上の多くの生物が経験する心的状態だろうが、その際、ヒトやミミズやタコなどのすべてに共通した同じ神経学的組織が存在し、それが同じ物理化学的状态になる、ということは考えられない。さらに、心的状態は、われわれ人間や動物たちのような地球上で進化した生物だけがもつ特権なのではあるまい。工学的に作られたロボットは議論の余地があるとしても、われわれと別の進化をたどった異星人が痛みの感覚をもつ、と考えることには何の困難もないだろう。しかしタイプ同一説によれば、タコや異星人（やロボット）も、われわれと同じ神経組織を備え、その神経組織が同じ物理化学的状态とならない限り、痛みの感覚をもつことはありえないのである。したがって、タイプ同一説へのこの反論が端的に示しているのは、痛みや欲求や信念といった心的状態タイプは、さまざまな素材によって多重に実現されるということ、そして、少なくとも神経組織の状態タイプよりも抽象度の高い高階の性質だ、ということである。こうして、歴史的には、タイプ同一説は機能主義の主張に席を譲った。機能主義の主張の要点はこうである。x を心的状態をもつ任意の存在者、M を＜痛い＞という心的性質、P_n をそれを実現する何らかの基盤性質だとすると、M は P₁ によって実現されるか、あるいは P₂ によって実現されるか、あるいは・・・であり、また、P₁ が出現するか、あるいは P₂ が出現するか、あるいは・・・であれば、M が実現される。つまり、心的性質は基盤性質の選言によって実現されるわけである。

$$Mx \Leftrightarrow (P_1x \vee P_2x \vee \dots \vee P_nx)$$

機能主義を初めて哲学の論争舞台に送り出したパトナムによれば、痛みは、物理化学的状态としての脳の状態ではない。痛みは、それとはまったく別の種類の状態、つまり「生物体全体の機能的状態」である。それゆえ、認知科学のこれまでの展開、とくに人工知能の研究に哲学的な基盤を提供してきたのはこの機能主義であったと言って間違いではない。というのも、認知科学こそ、そして人工知能の可能性の主張こそ、認知的な機能という抽象的なレベルでの＜理論＞に他ならないからである。機能主義が正しいがゆえに、ロボットも痛みをもつことができようというものだ。そしてもちろんこのとき、問題の二つの性質の同一性を諦めた物理主義者の最後の砦は、M という心的性質が P₁・・・P_n の物理的性質にスーパーヴィーンする、ということであった。そして、ここからキムの＜排除問題＞は出発する。

2. トラブル・メイカー (supervenience)

キムの議論は、スーパーヴィーニエンスに対するジレンマの形を取っている (Kim [1998] p.39-47)。

- (i) 心身のスーパーヴィーニエンスは成立するか、しないかのいずれかである。
- (ii) もし心身のスーパーヴィーニエンスが成立しないなら、心的因果の可能性を理解する明白な方法は存在しない。

もしこのスーパーヴィーニエンスが成立しないなら、心的なものは物理的な基盤なしに勝手気ままに物理的なものを因果的に引き起こし、したがって、物理的なものの因果的閉包性を侵犯するだろう。

- (iii) 心的性質 M の実現が、もう一つの心的性質 M* の実現を引き起こす、と仮定せよ。〈心⇒心〉因果。

- (iv) M* は、スーパーヴィーニエンスの物理的な基盤性質 P* をもつ。〈心→身〉スーパーヴィーニエンス。

(v) M* はこのとき、次の二つの仕方を実現されている可能性がある。(a) 仮定より、M が M* を引き起こす。(b) M* のスーパーヴィーニエンスの基盤性質 P* が、このとき実現されている。

M* は、その基盤性質 P* が実現するなら、M が先に実現されていようと何だろうと必ず実現される。逆に、M* が実現されているなら、P*、もしくはそれ以外の M* の基盤性質が実現されていなければならない。しかしそれなら、M が M* を引き起こす因果関係は、M* と P* のスーパーヴィーニエンス関係を経由している他はない。

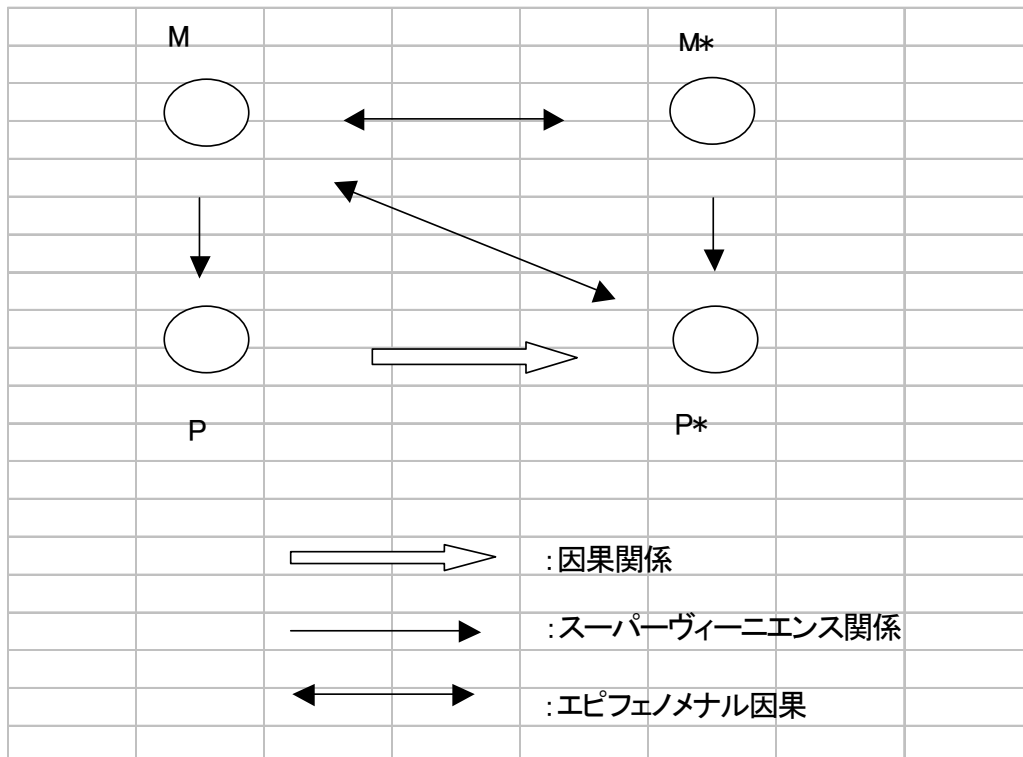
- (vi) M は P* を引き起こすことによって M* を引き起こす。これが、M のこの実現が M* を実現させる仕方である。〈M⇒P*⇒M*〉因果。

つまり、〈心⇒心〉因果関係は、〈心→身〉スーパーヴィーニエンスを含意する。

- (vii) M それ自身が物理的な基盤性質 P をもつ。〈心→身〉スーパーヴィーニエンス。

P は M の実現のために十分であり、M は P* の実現のために十分であるから、P は P* の実現のために十分である。また、P が実現しないなら、M が実現されずに、P* も実現しないであろう。よって、法則的にも反事実条件法的にも、P は P* の原因と見なされるべきである。すると、すでにここに、P* に対する過剰決定が出現している。〈P⇒P*〉因果と〈M⇒P*〉因果。しかし、この過剰決定は「銃弾と雷」のような偶然に生じる本物の過剰決定ではない。〈M⇒P*〉因果の際には常に〈P⇒P*〉因果が存在しているのだから、〈M⇒P*〉因果は常に余計であるだろうし、逆にもしこれが本物の過剰決定なら、〈M⇒P*〉因果は因果的閉包性を侵犯しているだろう。それゆえ、この状況を理解する道は次のように考えることである。

- (viii) P が P* を引き起こし、M は P にスーパーヴィーンし、M* は P* にスーパーヴィーンする。〈身⇒身〉因果と、〈心→身〉スーパーヴィーニエンス。

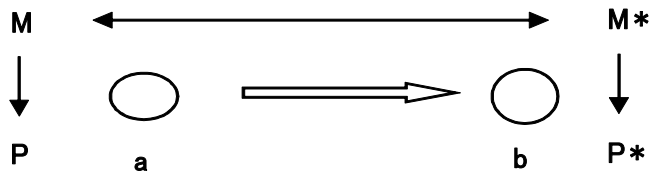


このことによって、M と M*の生起の規則性、および M と P*の生起の規則性が理解される。しかし、同時にそれによって、真性の実在的な因果関係とそれに寄生する非因果的な規則性の違いもはっきりする。<M⇒M*>因果の場合、それは実は真性の因果関係ではなく、走行する車の影の連続のようなものである。車の影の連続がどれほど法則的に生ずるように見えようと、それは車の走行という本物の因果関係に付きそう影にすぎない。したがって、

(ix) <M⇒M*>因果および<M⇒P*>因果は、<P⇒P*>という真性の因果過程から生じた見かけ上のものにすぎない。

(x)もし心身のスーパーヴィーニエンスが成立しないならば、心的因果は理解不可能である。しかしもしそれが成立するとしても、やはり心的因果は理解不可能である。したがって、心的因果は理解不可能である。

かくして、心的因果が理解可能であるなら、スーパーヴィーニエンスとは別の関係がそれを理解可能なものにしているものでなければならない。そして、その関係こそが心的性質と物理的性質の文字通りの同一性だ、とキムは言うのである。キムの場合に、<排除問題>がデカルト的な二元論のように劇的な形を取るのは、出来事に関する彼の存在論では、出来事の同一性は同じ構成的性質の例化を必要条件とするからである。したがって、P と M の二つの性質が同一でないなら、それらを構成的性質とする出来事も同一の出来事ではない(Cf. Kim [1993] Ch.3)。そこで、出来事に関してデイヴィッドソン型の存在論をとり、P と M の二つの性質が異なっても、それらを例化した心的出来事と物理的出来事が同一であることを認めるなら(Cf. Davidson [1980] ch.8, 邦訳7章)、キムの議論は、次のように少しはマイルドな形で描かれるだろう。そしてなぜ、キムにとって、性質間の同一性が切迫した要請であるかも見て取れるだろう。



しかし、現代の非還元的物理主義、例えばデイヴィドソンの非法則的一元論が採用するこの存在論的枠組みでは、性質 P と M は一つの出来事 a の二つの性質として理解されているとはいえ、困難がまったく解消するわけではない。というのも、このたび、因果的力を疑われるのは、出来事 a がそのゆえに b を引き起こしたはずの心的性質 M の方だからである。そして実際、非法則的一元論に対する最近の集中砲火は、それが心的性質を因果的にインポテンツにしまうという点に向けられていたのであった。つまり、この一元論の枠組みでも、a が b を因果的に引き起こすのは、それが心的性質 M をもつがゆえに (in virtue of)ではなく、物理的性質 P をもつがゆえにであって、M と M*は P と P*にスーパーヴィーンしている影にしかにすぎない。それゆえいずれにせよ、心的なものとしての限りでの心的なもの (mental qua mental) は、本物の因果関係の舞台から引きずり降ろされてしまうのである。

3. 凶報 (higher order properties)

この困難から抜け出すには、(1) 心的性質の因果的効力、(2) 物理的領域の因果的閉包性、(3) 過剰決定の回避、(4) 心的性質と物理的性質の非同一性、のいずれかを諦めなければならない。少なくともここ数十年の心の哲学の議論の半分は、非還元的な物理主義がいかにこの種の苦境に対処できるのか、という挑戦をめぐってのものであった。しかしその結果は、私を見る限り、はかばかしいものではない。反事実的条件法 (／仮定法) 的な因果解釈によって過剰決定を避けつつも、心的性質に文字通りの因果的効力を与えられないか (ルポア & レーワ、ベイカー、その他)、あるいは心的性質に文字通りの因果的効力を与えつつも、過剰決定を回避できないか (フォーダー、バージ、その他)、あるいはそれらの混合的ヴァリエーションか (ホーガン、ギュリック、その他) (3)。しかし、考えても見れば、心的性質に文字通りの因果的効力を与え、同時に物理的性質にも文字通りの因果的効力を前提するなら、物理主義に留まる限り、過剰決定を避ける手段はないであろう (事実、過剰決定を進んで受け入れて、非還元的物理主義と <排除問題> の両立を図る者もいる) (4)。

したがって、条件 (4) を放棄して、心的性質と物理的性質の同一性を認める還元主義の道が、最も見込みのありそうなものに思えてくるのは確かである。それによれば、心的性質が文字通りに因果的効力をもつとしても、それはまさしく物理的性質の因果的効力とイコールであるがゆえに、過剰決定は起こらない。そればかりか、最近のチャルマーズのゾンビ論法に対抗するためにも、物理主義の擁護のためには、意識性質と物理性質の同一性の主張が必要に思われるだろう。というのも、チャルマーズのゾンビ論法の急所は、スーパーヴィーニエンス関係がそもそも自然法則的な強さ以上の論理的な強さをもちにくいことから、意識概

念と物理概念の論理的な含意関係の欠如を盾に、物理的にはわれわれと同一の世界でありながそこから意識現象が一切欠けたゾンビ世界の想像可能性を主張するところにあるからだ(Charmers [1996] p.123)。スーパーヴィーニエンス関係に打ち込まれたクサビは、いわば、存在論的に別々の性質であるなら、自然法則的関連を越えたどこかの可能世界のスペースで必ずやゾンビ世界が存在する、というものである。したがって、自然法則的に可能な世界を越えたスペースにおいても物理主義を貫徹させたいならば、少なくとも、そのスペースでの問題の二つの性質のスーパーヴィーニエンス関係(チャルマーズの言い方では、論理的スーパーヴィーニエンス)を主張しなければならない。しかし、自然法則に根拠をおく性質間のスーパーヴィーニエンス関係と、性質間の同一性関係の間に、そんな都合のよい強さのスーパーヴィーニエンス関係が恣意的でなく設定できるだろうか? チャルマーズに対する物理主義者からの多く応答を見る限り、答えは悲観的である。しかし、もし意識概念と物理概念の間に論理的な空隙を認めたとしても(したがって、ゾンビ世界の想像可能性を認めたとしても)、それらの指示対象を同一の<意識-物理>性質だとすることができれば、性質の同一性が、ゾンビ世界の本物の形而上学的可能性を阻むだろう。というのも、同一の性質は、論理的に不可能いかなる世界においても同一であり、それゆえ、ゾンビ世界は文字通りまったく不可能となるからである。

パピノーによる「因果論証」は、明らかに、最初からチャルマーズ、クリプキらに対抗する還元的物理主義の論証のために<排除問題>を提示している。それによれば、

- (α) 意識的で心的な出来事(occurrences)は物理的な結果をもつ
(+物理学の完全性)
- (β) どんな物理的結果も、それに先立つ物理的歴史だけによって完全に引き起こされる。
- (γ) 意識的原因による物理的結果が常に異なった複数の原因によって過剰決定されている、などということはない。
- (δ) それゆえ、(α)の意識的で心的な原因は(β)の物理的原因の何らかの部分と同一でなければならない(Papineau [2002] p.18-9)。

パピノーが必要とするのは、われわれと法則を共有する可能世界におけるスーパーヴィーニエンスではなく、<どんな法則が成立しようとして>心的なものへの物理的なものへの存在論的依存性を保証する、すべての形而上学的に可能な世界におけるスーパーヴィーニエンスであり、それこそは、心的性質と物理的性質の同一性から導かれるのである。

しかし、非還元的物理主義に対するプレッシャーは、パピノー、ローフ、マクローリンのようなニューウェーブ唯物論からやってくるだけではない(といってもニューウェーブの中身は、古きよきタイプ同一説とあまり変わらないが)(5)。より深刻なことに、認知科学の存在論的な基盤を提供していた機能主義自体にも疑いが向けられ始めたのである。しかもこの疑いは、容易にあらゆる個別科学(special sciences)をも汚染するだろう。ブロックの疑いは、ある機能を果たす2階の性質がそもそも因果的効力をもちうるのか、ということだった(Block [1990] p.155-66)。機能主義によれば、機能的性質とは、<入出力や内部状態相互間で特定の因果的役割を果たす1階の性質をもつ>という2階の性質である。つまりそれによればある人に痛みが生ずるといえることは、皮膚が損傷したときに、その人の心身状態との兼ね合いで、傷口をかばったり、顔をしかめたりさせるような性質をその人がもつ、ということである。そこで例えば、闘牛士のケープの赤さは牛を挑発するとしてみよう。つまり、その赤さが牛の怒りを因果的に引き

起こす。ところで、そのケープは、牛を挑発する何らかの性質をもつという性質、つまり挑発的であるという 2 階の性質をもっている。その挑発性は牛の怒りに因果的に関与しているだろうか？ 答は否であるように思われる。牛は、挑発性に敏感なほど賢くはない。ブロックの言うように、そのケープの挑発性が挑発するのは、牛ではなく ASPCA（アメリカ動物愛護協会）の方であろう。あるいはまた、もし催眠性の薬（バリウムやセコナール）をあなたが飲み、しかもその薬を飲んだことすらあなたが知らなかったとしたら、あなたの眠りを因果的に引き起こしているのは、バリウムやセコナールのもつ 1 階の化学的性質であって、催眠性という 2 階の性質それ自身ではないだろう。したがって、この場合、挑発性が牛を挑発するとか、睡眠性があなたを眠くさせると主張するのは、心的因果性の場合と同じ恒常的な過剰決定を認めることになる。しかも、それは心的因果の場合よりも一層具合が悪い。というのも、1 階の性質による因果関係があれば、〈その性質をもつ〉という 2 階の性質を常に構成することができるし、さらに〈その 2 階の性質をもつ〉という 3 階の性質も構成することができるからである。しかし、1 階の性質だけでその結果を生じさせるのに十分な因果的効力があるのに、それより高階の無限に多くの性質も同じ因果的効力をもっているのだろうか。

かくして再び、因果的な仕事の一切を行っているのは 1 階の性質なのだから、機能的性質を含めた高階の性質は因果的にインポテンツだ、という過剰決定〈排除〉の論理が、1 階と 2 階の性質の同一性を受け入れさせる圧力となる。もしこの同一性を拒否すれば、影響は個別科学全体に及ぶほど甚大である。というのも、2 階の（機能的）性質とは、「1 階の性質相互がしかじかに関係しあう」という仕方で指定される性質をもつ、という性質であった。ところで、生理学的な性質は、心理学的な性質から見れば 1 階の性質であるが、生物学的性質から見れば、「生物学的性質がしかじかに関係しあう」という仕方で指定される性質をもつ、という 2 階の機能的性質であろう。またさらに、その生物学的性質も、その下の化学的性質から見れば 2 階の性質であろう。すると、もし、これらの性質が恐らく一番下の最も基礎的な物理学的性質と同一でないなら、それ以外の個別科学のすべての性質は因果的効力をもたないエピフェノメナルな性質だということになるだろう。つまりその場合、最も基礎的な物理学だけが本物の因果関係を扱っているのであって、それより上位のすべての科学は影絵にしかすぎないエピフェノメナル因果を扱っていることになるのだ。それゆえ、個別科学の扱う因果の実在性は、それらすべての性質が物理的性質と同一であることを要求するように見えるのである。

4. 幻影 (epiphobia)

しかし、これで話がすべて終わるわけではない。というのも、〈排除問題〉という新たな議論によって導かれる還元的物理主義は、結局のところ、古きよき性質同一説の焼き直しに他ならず、それゆえ、それが抱えていた欠陥を依然として引きずっているからである。したがって、もしその欠陥が受け入れられないようなものなら、非還元的物理主義は、〈排除問題〉から脱出する道を独自に探さなければならない。もはや、私にはその道、つまりエピフェノメナリズムの積極的な受容を確かな仕方で描くスペースは残っていないが、以下に三つだけ、性質還元的物理主義がどの点で満足 of いくものでないかを述べておくことにしよう。

まず第一に、心的性質を含めた機能的性質を物理的性質と同一とすることによって、機能的性質は、その機能的性質として因果的効力をもつようになるのでは

ない(Block [1990] p.165)。というのも、機能的性質がふつう多重実現されることを考えれば、性質の同一性はローカルなものにならざるをえず、例えば「このワインはうまい」というあなたの信念は神経生理学的な状態であって、もはや、異星人やロボットといったさまざまな実現体にまたがる心理学的な状態ではなくなるのだ。このことの意味は深刻である。1節での多重実現の図を思い起こすなら、P1によって実現される心的性質 M と、P2によって実現される心的性質 M は、 $P1 \neq P2$ であるがゆえに同一ではありえない。ということは、多重実現される単一の機能的性質は存在しない、それゆえ、それについての法則も、それについての科学も本当は存在しない、ということだ。したがって機能的性質を扱うがゆえに認知科学も存在しない(?)、それどころか生物学も、神経生理学すらも(!?)。

第二に、外在主義者のよく知られた議論によれば、クオリアはいざしらず、「広い内容」をもつ心的状態は脳状態にグローバルにしかスーパーヴィーンしない。したがって、同一の脳状態が、その環境や歴史の違いにより別々の信念に対応することがありうるのだから、そのような信念「このワインはうまい」と脳の物理的性質は同一ではありえない。もし心脳のローカルな性質同一性が成り立つとすれば、それはせいぜい、脳にローカルにスーパーヴィーンすると思われる心的性質と、脳の物理的性質との同一性であろう。その心的性質はひょっとすると、フォーダーがかつて求めた「狭い内容」《このワインはうまい》であるかもしれないが、「このワインはうまい」という掛け値なしの信念ではありえない。それゆえ、性質の同一性が確保する因果的効力は「狭い内容」にしか属さないのだから、心的内容そのものは因果的に無力だ、というこれもよく知られた外在主義者の議論に対して、性質還元的物理主義がうまい解決を与えられるわけではない。

第三に、そしてこれが最も根本的な点なのだが、性質還元的物理主義は、心的性質と物理的性質は異なる、というわれわれの深い直観に反している。もちろん、直観は真理の確実な導き手とはならないし、ある場合にはなじみの直観の方に我慢してもらうことも必要であろう。しかし、心的性質と物理的性質の場合には、その違いに関する直観を扼殺することは犠牲が大きすぎると思われる。少なくとも私にとって、自分が脳状態の主人となって経験する赤の感覚と、その時の自分の脳状態のさまざまな物理的性質、例えば神経パルスの発射や神経伝達物質の放出などのありようが同一の性質だと主張するのは、クレイジーとは言わないまでも、あまりにも無理があるように思われる。より直観にかなっているのは、同一の脳の出来事に対して、われわれは心的(主観的)と物理的(客観的)という二つの異なった性質を通してアクセスできるという立場ではないか。大人の(?)物理主義は、サールを初めとする多くの反物理主義者の直観をむしろ素直に認められるようなものでなければ、最終的な説得力をもつことはできないだろう。

というわけで、非還元的物理主義が探求すべき戦略として私が提案したいのは、3節の冒頭の4条件「(1) 心的性質の因果的効力、(2) 物理的領域の因果的閉包性、(3) 過剰決定の回避、(4) 心的性質と物理的性質の非同一性」のうち、(1)「心的性質の因果的効力」の放棄である。恐らく、これを放棄するのは、ゲーム自体から降りてしまうように見えるだろう。それほどに、論争の参加者たちにとって、エピフェノメナリズム恐怖症(epiphobia)は根深いものがある。フォーダーがどこかで述べていたように、もしエピフェノメナリズムが真なら、「it's the end of the world!」というのが実感だろう。たぶん、サールが現代の物理主義者の苦悶を強迫神経症と呼ぶ背景には(Searle [1992] p.31)、この恐怖症が核心にあるに違いない。しかしだからこそ、問題の突破口はエピフェノメナリズム恐怖症の幻影を追い払うところにあるのではないか(6)。

性質に関するエピフェノメナリズムは、その性質からそれ独自の因果的力を奪うことにはなるが、その性質の存在を否定するわけではない。それどころか、その性質の存在を認めるからこそエピフェノメナリズムが成立するわけであり、因果的力に関しては、物理主義はそもそも、いかなる出来事／性質にも物理的なものから逸脱し、それを凌駕する因果的力を認めることができないのだ。したがって、性質同一説からエピフェノメナリズムへの主張の転換に、これらの点で、いかなる存在論的なロスもあるはずがない。しかし、確かに、解決すべき問題も多くある。すでに述べたように、物理主義的エピフェノメナリズムの実質的な擁護は別に改めて展開するが、ここでは、当面課題となる次の三つの問題だけをあげておこう。これまでの議論からすれば、このエピフェノメナリズムは個別科学に登場するすべての因果をエピフェノメナル因果とせざるをえない。したがって、そこに現れるどの性質にも、因果的力というようなものは存在しない。すると第一に、個別科学の法則もまたエピフェノメナルな法則とならざるをえないが、むしろ、これらのことを前提に、個別科学、法則、（機能的）性質などについての整合的な説明を新たに組み立てなければならない。恐らく性質のもつ因果的力＞という観念もまた、一つのオブセッションであろうが、これに裏打ちされない高階の性質や法則の存在、およびそれらによる説明の論理はどのようなものになるのか（個別科学と因果的説明の理論）。したがって、第二に、いわゆる因果過程に関与しない性質と関与する性質との区別を、因果的力という概念に依存することなしに区別するために、因果関係そのものに関するエピフェノメナリスト理論を構築しなければならない（法則論的か、反事実条件法的か）。存在論的には、物理的な因果関係に優先権を認めつつも、それに寄生する因果関係をどう理解すべきか（因果関係の理論）。そして第三に、物理主義的エピフェノメナリズムが性質間の同一性ではなく、スーパーヴィーニエンス関係に頼る限り、この関係をどれくらい強いものだと主張しうるのかについても見通しを与えなければならない。これはとりもなおさず、物理主義がそもそもどのような可能世界にまたがった主張だと理解されるべきか、という点に関わっている。物理主義者はそろそろ、＜可能世界＞という怪しい道具立てを無邪気に振り回すのを止めて、この道具の正しい扱い方を考えるべき時期に来ているのではなかろうか（可能世界の理論）（7）。

さて、以上の三つの課題をまるで科研費の「申請書」のように並べてしまったのは恥ずかしい限りだが、どうか「達成目標」なみの空約束とは考えないでほしい。ところで、エピフェノメナリズムの最も肝心な点、心的性質の因果的効力を諦めることには困難がないのだろうか。実は、これは、情緒的な反応を除けばそう大した問題はなかろうと考えている。というのも、物理主義をとる限り、心的性質にはそもそも因果的力がないか（エピフェノメナリズム）、あるいはあっても物理的性質としてであるか（還元主義）のどちらかであって、いずれにせよキムの言う通り、心的なものが心的なものであるがゆえの独自の力を振るうことはできないからである（Kim [1998] p.119）。

注

1. エピフェノメナリズムは、随伴平行説と訳されたりするが、その古典的な形態は、精神と延長という二つの実体領域の内部での因果過程の同時並行的な進行であり、二つの精密な時計の予定調和の比喻で理解されることが多い（例えば、マールブランショ）。マクローリンの用語で言い直すと、この古典的なエピフェ

ノメンナリズムは心的出来事に関するトークン・エピフェノメナリズムであり、心的性質に関する現代の非還元的物理主義のエピフェノメナリズムは、タイプ・エピフェノメナリズムである (McLaughlin [1989] p.109-10)。

2. スーパーヴィーニエンスとは、ごくごく大ざっぱに言えば、二つの性質（群）の間の依存関係に関する主張である。例えば、A 性質（群）が同じであるのに B 性質（群）が異なっているということがありえない場合（その逆は成り立たなくともかまわない）、B 性質（群）は A 性質に（群）にスーパーヴィーンする（付随生起する）と言われる。したがって、B 性質を引き連れる A 性質の実現は、常に B 性質の実現を（何らかの強さで）必然化する。ここで、A を物理的性質、B を心的性質とすれば、物理主義者が望むく物理的性質による心的性質の決定が、両者の同一性より弱い形であれ実現されているわけである。

3. 例えば、LePore & Loewer [1987], [1989], Baker [1995], Fodor [1990], Burge [1993], Horgan [1987], [1989], Gulick [1993] など。これらの興味深い議論の詳細については、拙書『心はいかにして世界を動かすか』（勁草書房、近刊予定）を見られたい。

4. Bennett [2003] は少し面白い試みである。われわれの原因指定の曖昧さに対応して、ポイントは二つ。過剰決定を起こす二つの原因が＜必然的な＞連動関係にある場合、一方の原因が生じないときは常に他方の原因も生じないがゆえに、過剰決定（を表す反事実的条件文）は、前提が成り立たないという意味で空虚に成り立つ（無害）。他方、＜一方の原因が結果を引き起こすための必要条件の一つ＞、それがまさにもう一方の原因を＜必然化＞する場合、前者の原因が生じても後者の原因が生じていなければ（問題の必要条件が生じていないので）結果は生じないがゆえに、過剰決定は成り立たない。しかし、ゾンビ世界を不可能とするこの必然性の正体がどうあれ (ibid, p.491)、法則的な因果関係の構図でこの状況を見直すなら、やはり心的なものそれ自体は何も因果的役割を果たしていない。

5. 「ニューウェーブ唯物論」とはホーガン & ティーンソンの命名であり (Horgan & Tienson [2001])、それに対する彼らの批判にマクローリンが応えている (McLaughlin [2001])。

6. 私自身、そう示唆したことはあるが（柴田 [2000] 4 節）、しかしさすがに、正面切ってエピフェノメナリズムを擁護した論文はほとんど見当たらない、とかえって意を強く（？）していたところ、ようやく一つ見つけることができた。ホロウィッツによるその物理主義的エピフェノメナリズム擁護論 (Horowitz [1999]) は、私の見るところ、古典的エピフェノメナリズム批判に対処するものとしてはおおむね妥当なものである。

7. その議論の端緒として、一部の物理主義者にはかなり評判の悪かった「崖っぷちテーゼ（？）」＜ひ弱な物理主義＞（柴田 [2003]）を参照して頂ければ幸いである。

参考文献

- Baker, L. R. 1995, *Explaining Attitudes*, Cambridge University Press.
Bennett, K., 2003, "Why the Exclusion Problem Seems Intractable, and How, Just Maybe, to Tract It", *Nous*, Vol. 37, No. 3.
Block, N. 1990, "Can the Mind change the world?", in Boolos [1990].

- Bohoss, G. 1990, (ed.), *Meaning and Method*, Cambridge University Press.
- Burge, T., 1993, "Mind-Body Causation and Explanatory Practice", in Heil and Mele
[1993]
- Chalmers, D., 1996, *The Conscious Mind*, Oxford U. P. (『意識する心』林一
訳、白
揚社)
- Davidson, D., 1980, *Essays on Actions and Events*, Oxford U. P. (『行為と
出来事』服
部裕幸・柴田正良訳、勁草書房)
- Fodor, J., 1990, *A Theory of Content and Other Essays*, The MIT Press.
- Gillett, C. and B. Loewer, 2001, *Physicalism and Its Discontent*, Cambridge
U. P.
- Gulick, R., 1993, "Who's in Charge Here? And Who's Doing All the Work",
in Heil and
Mele [1993]
- Heil, J. and A. Mele, 1993 (eds.), *Mental Causation*, Clarendon Press,
Oxford.
- Horgan, T. 1987, "Supervenient Qualia," *The Philosophical Review*, 96, 4.
----- 1989, "Mental Causation," *Philosophical Perspectives*, 3.
- Horgan, T., and J. Tienson, "Deconstructing New Wave Materialism", in
Gillett & Loewer
[2001]
- Horowitz, A., 1999, "Is There a Problem in Physicalist Epiphenomenalism?",
*Philosophy
and Phenomenological Research*, Vol. 59, No. 2.
- Kim, J., 1993, *Supervenience and Mind*, Cambridge U. P.
-----1998, *Mind in a Physical World*, The MIT Press.
- LePore, E. and B. Loewer, (1987), "Mind Matters," *Journal of Philosophy*,
84, 11.
----- 1989, "More on Making Mind Matter," *Philosophical Topics*, Vol.
17, No. 1.
- McLaughlin, B., 1989, "Type Epiphenomenalism, Type dualism, and the
Causal Priority of
the Physical", *Philosophical Perspective*, 3.
-----2001, "In Defence of New Wave Materialism", in Gillett & Loewer
[2001]
- Papineau, D., 2002, *Thinking about Consciousness*, Oxford U.P.
- Searle, J., 1992, *The Rediscovery of the Mind*, The MIT Press.
- 柴田正良, 2000, 「あれかこれか-----行為の因果説と心の非法則性」『哲学』51
号
-----2003, 「ゾンビは論理的可能性ですらないか?」『コネクショニズムの
哲学的意義の研究』科学研究費研究成果報告書(研究課題番号 12410003)